

第 28 号

2005 年 6 月

社會經濟史學會中國四國部會  
會 報

編集発行：

中国四国部会

事務局

(松山大学経営学部内)

## 2005 年度大会ミニ・シンポ「鳥取県の製鉄史」について

鳥取県庁 大川 篤志

1989(平成元)年以来 16 年ぶりに鳥取県で開催される今年度の当部会大会におけるミニ・シンポジウムのテーマは、「鳥取県の製鉄史——成果と課題——」である。

鉄は、近世期から近代初期において、鳥取におけるもっとも重要な物産のひとつであった。近世期の物産構成を数量的に知るのには困難だが、さしあたり 1874(明治 7)年『府県物産表』により明治初年の様子を見ると、鳥取県の工業生産額の 2 割近くを鉄類が占めていたことが分かる。また、1878(明治 11)年の港湾調査報告『二府四縣采覧報文』の数字では、県下最大の物流拠点であった境港の移出額の 3 割強が鉄類であった。このように地域の社会経済において重要な地位にあった鉄の歴史に対しては、地元の歴史研究者も従来から大きな関心を寄せてきたところであり、久しぶりの鳥取大会でとりあげるのに相応しい対象ではないかと思われる。本シンポでは、これら鳥取の鉄に関する研究史の成果を振り返り、今後の課題を探ることをねらいとしたい。

そのため、組織者である伊藤康氏(鳥取県立公文書館)による問題提起の後、次のような 3 本の報告が用意されている。

第一報告は、県内最大の鉄産地であった

日野郡の大鉄山師近藤家の文書に長年にわたって取り組んでこられた影山猛氏の報告である。18 世紀半ばから近代に至るまでの膨大なストックが残されている同文書は、鳥取の製鉄史研究の中心に位置してきた貴重な依拠史料である。『近藤家資料集』全 3 編を編まれた影山氏自身、同史料から多くの研究を行ってこられた(その成果は伯耆文化研究会『伯耆文化研究』各号等で見ることができる)。本報告では、まず、10 万点とも 20 万点ともいわれるボリュームを持ち内容も多岐にわたる同文書の史料としての概要と、それを利用した研究史について概観が与えられる。その後、たたら鉄の生産量・形態、鉄の相場、職人の給与等について、同文書を利用した検討が行われるであろう。

次いで第二報告は、山脇幸人氏(倉吉博物館)による県中部のたたら製鉄に関する報告である。上述のように、日野の近藤家文書のようなまとまった史料がほかにないため、また近藤家による経営が県内で群を抜いて大規模であったため、県内他地域の製鉄史については、従来、日野に比べて手薄であったといわざるを得ない。しかし、鳥取県の製鉄史を語るのであれば、県中部の

天神川水系における製鉄も等閑視できないであろう。そうしたなか、山脇氏は、主に三朝町のたたら経営についての研究に着手されている。資料的制約の大きい状況ではあるが、本報告では、日野の近藤家と比べると遥に小規模ながら近世期にたたら経営を行っていた安田家の文書と藩政史料とを利用した研究の成果が示されるであろう。

最後の第三報告は、やや趣向を異にして、自然科学の分野からの寄田栄一氏による報告である。耐火物の成分分析を専門とする同氏の報告は、鳥取県中部の大栄町に残る六尾反射炉で使われた鉄原料の分析に関するものである。反射炉による幕末期の大砲鑄造に関しては、一般に、原料として在来のたたら鉄が不向きであったことや、高炉銑へ切り替えて成功した反射炉の例が知られているが、六尾反射炉では、たたら鉄を用いて大砲が鑄造され、その試射にも成功したという。報告では、こうした点についての検討が行われ、たたら製鉄法と現在の製鉄法の違いについても比較が試みられるであろう。

ところで、近年の社会経済史学は近隣学問分野への接近やその研究成果の吸収に意欲的といえるが、製鉄史に関しては、とく

に考古学や冶金学の分野からの研究が盛んであり、それらは文献史的な研究を行う者にとっても有益な成果を多くあげてきたところである。本報告も、そうした傾向のなかに位置付けられるものといえよう。また、鳥取のたたら鉄の品質や消費動向を考える上でも、示唆に富む報告となるだろう。

以上、3本の報告の後、お二人のコメントよりコメントが寄せられる予定である。お一人目は、近代日本経済史がご専門で塩業とたたらを主なテーマとされている、島根大学の相良英輔教授にお引き受けいただいている。もうお一人は未定であるが、いずれにしても、コメントに続く最後の全体討論とあわせ、活発で有意義な議論が行われるものと期待している。

なお、大会会場である鳥取県民文化会館に隣接する鳥取県立公文書館では、大会2日目の11月6日(日)まで、日野郡のたたら製鉄に関する展示が行われている予定となっている。大会参加者諸氏には、シンポの内容と密接に関連するこの展示をご覧いただくことをお薦めしておきたい。

## 都市史と農村史のあいだ

広島大学 加藤房雄

本年2月、『ドイツ都市近郊農村史研究——「都市史と農村史のあいだ」序説』と題する小著を、勁草書房から出版しました。前著『ドイツ世襲財産と帝国主義』の公刊が、

1990年のことでしたから、それからすでにおよそ15年という相当な時が過ぎています。もっと早く仕上げることはできなかったものかと内心忸怩たる思いを禁じえませ

ん。それはともかくとして、わたくしにとって第二作に当たる本書は、前著同様、ドイツ、とりわけプロイセンの農業・土地所有問題に的を絞りつつ、さらに一步を進めて、サブタイトルに示したとおり、「都市史と農村史のあいだ」と言うべき新領域にも鉾を入れることを意図しています。少なくともこの後者の作業は、ドイツのみならず、より広く、ヨーロッパ全般の社会経済史研究史上の新しい分野の開拓に繋がりを意味を持つのではないかと自分では考えております。さて、その内容は、大略以下のとおりです。

プロイセン・ドイツの近代化は、大塚史学を中心としたわが国の戦後歴史学やドイツの「連続性」論者が、必ずしも十分な実証を伴わずに永く想定してきたような社会反動的類型に過ぎず、それは、近代ヨーロッパ史におけるイギリス型あるいはフランス型とは鋭く峻別される別物にほかならぬと見なし続けて、歴史認識上あるいは方法論上の問題は、もはやなんら残らぬ、と断言してよいのでしょうか。本書は、この一点に集約される基本的問題意識、いや、と言うよりもむしろ、素朴な疑念に発して、ドイツ近代社会形成史上の無視すべからざる問題群に即し順次系統的な検討を加えた試論的一習作です。前編 ドイツ大土地所有の歴史的役割、そして、後編 ドイツ都市農村連続体の歴史的個性、の二編構成を取る本書は、「東エルベ農村社会史論覚書」と題する緒論を冒頭に配して、当該の問題意識をめぐるワールドワイドな研究史を批判的に整理した上で、本書全編にわたる固有の分析課題の大枠を設定しました。

「土地所有と近代社会の相関」という古典

的ながら、いまなお、その重要性をいささかも失ってはいない社会経済史研究上の基本的な大テーマを、近代ドイツ史を対象として追跡しようとするれば、ドイツ大土地所有の実体を成すユンカー的土地所有、ならびに、世襲財産（フィデイコミス）所領の実証的討究は、おのずから不可欠です。戦後歴史学のア・プリオリな規定とは逆に、ドイツ近代化促進の固有の効用とドイツ資本主義の近代的展開の安定的一基盤とを、ドイツ大土地所有の歴史的役割として見抜くこと、これが、研究史批判と実証分析を経て逐次検討した結果可能となる本書前編の問題提起の概要でした。

後編においては、世襲財産＝土地所有の実証的追究を、前著に引き続き継続しながら、都市社会史をも含む近代社会生成上のダイナミックな現代的局面に着目しました。「都市と農村のあいだ」と言うべきベルリン圏のテルトウ郡は、「都市近郊ゲマインデ」を数多く持つ「都市農村連続体」と呼びならわされるにふさわしい個性的地域類型の一環を成しています。「ポツダム・アルヒーフ」所蔵未公開一次史料を基礎にして、一方においては、地方自治体による「給付行政」の業績を、ペンドラー労働者の階層的生成を伴う都市化の進展との関連に止目しつつ明らかにし、併せて、プロイセンにおける地方自治（「ゲマインデ自治」・「クライス自治」）の歴史的役割をめぐる積極的見直しも行い、同時に他方では、従来未開拓だった「都市史と農村史のあいだ」と言うべき近現代ドイツ社会経済史研究史上の一つの新領域を、独自の理論視角から切り拓くと言う、二段構えの検討作業を経て、戦後歴史学以降の伝統的ドイツ史像を批判し、それに代わ

りうる新しい映像の問題提起を試みることによって、本書全編にわたる叙述を終えています。

以上が、本書の概容です。小著の評価については、先学・同学の諸氏のご判断にお任せしたいと存じます。『社会経済史学』誌では、東京大学の馬場哲氏が書評執筆の労を取って下さると伺っております。最後に、少しく異例かもしれませんが、小林昇先生がお寄

せ下さった過分な、しかし、わたくしにとっては実にありがたかったご感想の一節を紹介して、小文の結びとさせていただきます。

「このご成果は、近代日本とは何かを考える場合にも必ず顧みられるべきものとなることでしょう。わたくし自身はたしかに、貴著によって目を開かれた者の一人です。」小林先生のご激励の言葉を胸に刻んで、研究を続けて行きたいと思っております。

## 田園空間認識の比較史研究

香川大学 原 直行

香川大学経済学部の原直行です。現在、私は「田園空間認識の比較史研究」というテーマで研究に取り組んでいます。そもそも、このテーマに取り組むこととなった発端は2003年4月～2004年3月の1年間にわたるイギリスでの海外研修でした。当初、「イギリスにおける農業史・農村景観史研究の方法論に関する研究」というテーマで渡英し、レスター大学イギリス地方史センターに客員研究員として滞在したのですが、日本農業史を専攻している私にはこれだと思いう研究方法・テーマを見つけられず、なかなか研究が進みませんでした。言葉の問題にも苦労させられ、大学の研究室に足が向かなくなる日が続くこともありましたが、ただその一方で、地図を片手にイギリスの田園地帯は頻りに歩き、農業経営の様子、作目の観察だけにとどまらず、生垣によって区切られた農地がパッチワークのようにどこまでも続く田園地帯の美しさに魅了されたり、また、地元レスター州においてフツ

ト・パスの整備や生垣の修繕を行う環境保全のボランティア活動に参加したりしていました。やがて、田園地帯を歩く人やボランティア活動に携わる人たちと接しているうちに、「イギリスの農村・田園はもはや単なる食料生産の場としてだけでなく、都市住民にとってのレクリエーションや娯楽などの消費の場ともなっている」ということを思うようになり、「イギリス人にとって農村・田園とは何か」ということに興味を持つようになりました。その後イギリスでは専ら、イギリスにおける田園空間認識の歴史研究、具体的には「Rural Idyll」に関する研究に従事していました。

「Rural Idyll」とは、直訳すれば「農村の田園風景」あるいは「農村のロマンティシズム」であり、意訳すれば「農村の田園絵画風な、あるいはロマンティックな理想化」のことです。それは農民・農村固有の観念ではなく、むしろ都市住民のそれですが、この観念は産業革命期に生まれました。

当初は文学や絵画が、それまでの文学・美術史の流れに加えて産業革命により進展した工業化・都市化に対する批判的な対抗軸として、農村・田園を美化・理想化していったことから始まりました。次いで、都市の中流階級が工業化・都市化の進展の負の側面ともいうべきスラムを忌避するようになり、平穏・清浄な農村・田園を求めて郊外に進出するようになりました。ここでも農村・田園のロマンティックな理想化が行われていきました。このような農村・田園の理想化は、中流階級を中心に1860年代以降1900年代初頭にかけて、ナショナル・トラストや共有地保全協会といった景観、建物、野生生物などの各種の保全活動団体の結成につながっていくと同時に、労働者階級までも含めた1930年代におけるランプリング（田園地帯・山岳地帯を歩くこと）の流行をもたらすことになりました。Rural Idyll はイギリスの都市住民全体に広がっていったのです。第2次大戦後も Rural Idyll はますます広がりつつあります。1970年以降、イギリスの農村部では人口が増え続けています。これは自然増ではなく、社会増によるもので、農村、海岸、暖地を求めた主に高齢層の移住によるものです。また、EUの共通農業政策（CAP）がそれまでの生産主義から環境重視型・持続可能な農業政策にシフトした1980年代以降において、農業生産に代わる新たな所得獲得機会として「Rural Tourism（農村観光）」の振興が盛んに提唱されていますが、ここでもやはり Rural Idyll が強調されています。（Rural Idyll については、拙稿「近代イギリスにおける「Rural Idyll」について」（『香川大学経済論叢』77巻2号、2004

年）を参照してください。）

翻って、日本における田園空間認識とはどのようなものだったのでしょうか。しかし、残念ながらこの歴史研究はまったくといっていいほど行われていません。現在、私は日本における田園空間認識の歴史研究に携わっていますが、そのなかでわかってきたことは、戦前期日本、とくに1920年代から30年代にかけて、日本の農村は「貧困」の象徴であったということ、そして貧困の象徴としての農村は戦後も高度成長期くらいまで持続してきたということ、ところが1990年代に入って農政がそれまでの基本法農政から「新しい食料・農業・農村政策の方向」（新政策）へと大きくシフトしてきたのに同調して、日本の都市住民の間でも農村を「憩い」や「やすらぎ」の場、レクリエーションの場とみなす論調がみられるようになってきたということです。このような変化がなぜ起こったのかということをも明らかにし、さらにイギリスの歴史と対比したとき見出される相違がなぜ起きたのかという日本とイギリスにおける田園空間認識の比較史研究を行うことが、私の目下の研究課題です。道は険しそうですが、日本でも学生と農村を歩いたりしながら、楽しく研究に取り組んでいます。

2005 年度社会経済史学会中国四国部会  
大会の御案内

開催場所 : 鳥取県立文化会館

開催日 :  
2005 年 11 月 5 日(土)・6 日(日)

\* 第 1 日目は自由論題報告、第 2 日目はシンポジウムを予定しています。

#### 本年度部会鳥取大会報告者募集

上記の日程で中国四国部会大会を開催します。自由論題報告を御希望の方は事務局まで、報告テーマ、氏名、所属を、同封の葉書か振込用紙に御記入の上御申し込み下さい。メールによる申し込みも受け付けております。

申込〆切は 8 月 19 日(金)です。

#### — 編集後記 —

今号は、来る 11 月に、鳥取県立文化会館で開催されます社会経済史学会中国四国部会において、「鳥取県の製鉄史」というミニ・シンポジウムを準備して頂いている大川篤志先生に御寄稿頂きました。加えて都市史と農村史の立場から加藤房雄先生、田園空間認識の観点から原直行先生にも御寄稿頂きました。いずれの文章も大変有益な示唆に富んでおり、専門分野の如何を問わず、部会メンバー全員にとって、質・量ともに勉強になる内容となっております。昨今の社会経済史学会では、研究内容の精緻さが求められるあまり、とかく他分野への関心を喪失しているように感じられます。中国四国部会においては、可能な限り専門分野の垣根を越えた率直な議論が展開されますことを期待しております。御多忙のこととは存じますが、今年度部会にも是非とも多くの方々に御参加頂きますよう、よろしく御願い致します。

文責： 西村雄志

---

#### 社会経済史学会中国四国部会事務局

〒790-8578 松山市文京町 4-2  
松山大学経営学部 平田桂一研究室

e-mail: [hiratak@cc.matsuyama-u.ac.jp](mailto:hiratak@cc.matsuyama-u.ac.jp) 電話: 089-926-7299 (研究室)